

[COMMUNION]

WEB:http://www.nskk.org/

tokyo/index.html

E-mail:comm.tko@nskkn.org

PHONE:03-3433-0987

FAX:03-3433-8678

Diocese Office

《ペンテコステメッセージ》
風、音、炎、舌、今も働く聖霊

司祭 オーガスチン 杉山修一

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。

(使徒言行録2章1〜3節)

「風」

若い頃、私は「ナナハン」と呼ばれた大型オートバイに乗っていました。「風」を切って走る爽快感がたまらなく好きでした。海風に吹かれるためオートバイに乗って海に出かけ、目を閉じると遙か彼方から吹いてくる「風」が私を未知の世界に連れて行ってくれるようで、心が熱くなりました。ポール・ヴァレリーの詩『海辺の墓地』の1節を「風立ちぬ、いざ生きめやも」と訳して小説のタイトルにした堀辰雄も「風」には人生を生かす命の力があるように感じていたのでしょうか。

「音」

東京の女学校で仕事をしていた時、礼拝堂に新しいオルガンを導入することになり、何方所ものオルガンビルダーを訪ね、最もふさわしいオルガンを設置することができました。何千本ものパイプと多くのストップを持つオルガンが命ともいうべき



「舌」

神学生の頃、群馬県の老人ホームでの臨床牧会訓練した。えてくれるもので

「音」を出すには風が必要で、電気モーター式送風器とともに、電気のないバツハ時代の牛の皮を使った巨大な足踏みのふいご式送風器も用意しました。ふいごから送られる風の震動によって天から降りてくるように「音」が鳴り、生きる喜びを告げる演奏が行われました。オルガンに「命の音」を吹き込む風は神の息でした。

「炎」

1979年、聖アンデレ教会創立100周年の年、私は聖アン

デレ教会に勤務していました。記念礼拝でラムゼー・カンタベリー大主教が説教をされました。ラムゼー大主教は説教で聖霊を「火」に喩え、「火」は人間を温め、人間の心を燃えさせたせる、そして全てを焼き尽くす「大きな力」であると話されました(40年近く前の記憶で怪しい)。ラムゼー大主教の圧倒するような言葉と存在感は、まさに「炎」のように神の熱情を伝えてくれるもので

「舌」

神学生の頃、群馬県の老人ホームでの臨床牧会訓練した。えてくれるもので

練の折、Iさんという半身麻痺と「舌」がもつれて話せない言語障害のご老人と出会いました。彼が話す言葉は「なかなか〜」という一言だけでした。何をするにも「なかなか〜」だけ。ある日、Iさんが私に何か求める様子です。でも私には何かわからない。推測してあれこれ試みるのですが、どれも違う。そのうち彼は顔を真っ赤にして怒ってしまった。おろおろして

「今も働く聖霊」

いる私を尻目に、部屋に入ってきたベテランの寮母さんが「Iさん、はいよ」と言って尿瓶をあてがったのです。おしっこが我慢できなかつたのです。私にはそれがわからなかつた。言葉が理解できない悲しさをあれほど感じたことはありませんでした。相手の「舌」(ことば)を本当に理解できるための霊の力を欲しいと真剣に思いました。

聖霊降臨日に読まれる使徒言行録、集まっていた弟子をはじめとする人々の、「激しい風が吹いてくるような音」が聞こえ、「炎のような舌」が現れ、一同が聖霊に満たされた様子が記されています。「風、音、炎、舌」という身近な言葉で聖霊の存在を表現しているのです。「風」と「音」は神の息、人に命を与え、生かす神の力です。「炎」と「舌」は力強い神の言葉が与えられたことを示しています。聖霊はこのように今も私たちに働きかける神の影響力です。

(プール学院理事長・学院長)

特集 首座主教会議

今年の1月に、英国カンタベリーで首座主教会議が開催された。そこで議題に上がった問題は多岐にわたるが、重要な課題の一つに同性婚を認めたアメリカ聖公会への対応があり、大きな争点となった。今回、この会議に出席された植松誠首座主教の許可を得て、管区事務所便り1月号の文章を転載させていただくとともに、そこで出された声明の抜粋を掲載し、この問題に対して理解を深める一助としていただきたい。



ジャスティン・ウェルビー
カンタベリー大主教

聖公会首座主教会議に参加して

首座主教 ナタナエル 植松 誠

1月11〜16日、英国のカンタベリー大聖堂で、世界の聖公会（アングリカン・コミュニオン）の首座主教会議が開かれた。首座主教会議は、アングリカン・コミュニオンの4つの「一致のための機関」の一つであり、2年に一度くらい開かれてきたが、前回、2011年、アイルランドのダブリンでの首座主教会議は、アフリカ、アジアの首座主教の多くが欠席（ボイコット）し、それ以降5年間開かれていなかった。1998年のランベス会議あたりからクローズアップされた米国、カナダ聖公会での同性愛をめぐる問題で、今まで何回かの首座主教会議、全聖公会中央協議会では、アングリカン・コミュニオンの多くの管区が米・加聖公会を非難し、実際、アフリカのいくつかの管区は両聖公会と関係を断絶し

た経緯があった。さらに、昨年6〜7月の米国聖公会総会で、同性婚を認める決議（法規改正）をしたことから、アングリカン・コミュニオンの亀裂は一層深くなっていった。今回の首座主教会議には、カンタベリー大主教ジャスティン・ウェルビー大主教の熱心な出席要請と、米国聖公会を離脱した人々が新たに組織した北米聖公会（ACNA）の首座主教のフォーリー・ビーチ師が招待されていたことから、前回欠席した管区からも首座主教が出席し、病气などで欠席の2首座主教以外、全首座主教が出席した。

今回の首座主教会議を前に、アングリカン・コミュニオンはこの会議で分裂の道に進むとの予想がいろいろメディアで流され、実際、保守的な管区の集合体であるGAFCONの首座主教の内、何人かは今回の首座主教会議で自分たちの主張が聞き入れられない

場合は、会議の途中で退席する旨、事前に表明していた。そのような緊張感の中で首座主教会議は始まり、最初の日は半日、カンタベリー大聖堂での断食と黙想・祈りに当てられた。

結論を言えば、会議ではアングリカン・コミュニオンが分裂せずにこれからも共に歩むことが確認されたが、米国聖公会及びカナダ聖公会のこれまでの一連のヒューマン・セクシュアリティ（人間の性）への取り組みが世界の聖公会の多くの管区において深い傷を与えたこと、また今回の米国聖公会の決定が、過去の首座主教会議、ACC決議、ウインザー・レポート、ランベス会議決議などを無視する一方的な進め方であったことが厳しく指摘された。そして、その結果、米国聖公会に対して、今後3年間、アングリカン・コミュニオンのすべての部門、会議、ネットワーク、委員会などには正式参加をしないようにという勧告と、カンタベリー大主教に対して、今後この問題について検討するための特別委員会を設けることが提案され、これらの勧告・提案は大多数の首座主教の賛成で可決された。

今回の首座主教会議では、多くの主教が、教会における、また聖書で定められている結婚とは男女間の忠実な、

生涯にわたるものであるという点を強調し、そこから、米・加聖公会の同性婚の取り組みは正統信仰から離脱していると主張したが、首座主教の中にはそれらに真っ向から反対する者もあり、考え方や理解に大きな違いがあることも明らかとなった。

私は、今回の首座主教会議の結果に関しては大変複雑な、重く沈んだ気持ちでいる。世界の聖公会が分裂せずに、共に歩むことは確かに嬉しいことではあるが、その代償を見たときに、それがあまりに大きく、しかも正しいとは思えない。今回、キリストの愛の内に共に歩むというが、これらの勧告・提案の中に、性的マイノリティの人々（LGBT）への思いやりは少しも感じられない。この勧告が、米国、カナダだけではなく、世界のLGBTの人々に深い痛みと悲しみ、また教会に對する不信を与えることを私は危惧している。（実際、最終日の記者会見場の外では、抗議する人々約40人がプラカードを掲げて、特にアフリカの首座主教たちへの抗議を叫んでいた。）

今回の首座主教会議の結果は、少しも問題解決にはなっていないし、これからも分裂の可能性は否定できない。米国聖公会がこの3年間で、先の総会の決議を取り下げることが考えられない

し、カナダ聖公会では今年の総会で、米国聖公会と同じような決議がされるかもしれない。また、英国聖公会内でも激しい議論が起きているからである。そもそも首座主教会議とは、どこかの管区の自治・自立（律）に、そこまで介入できる権限はないはずだし、（今回の首座主教会議の結果が、勧告とか提案とされているのはそのためであるが）、今後、アングリカン・コミュニケーションの管区間でも、双方間の交流や対話をもっと充実していかなくてはならないであろう。

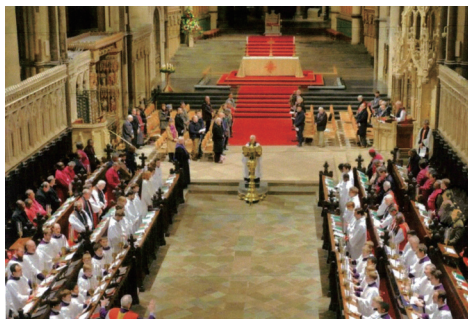
今回の首座主教会議では、上記の問題が大きなテーマではあったが、その他にも、環境、難民、イスラム、宗教が絡む暴力（テロ）、教会における子どもの保護、汚職（特にアフリカにおける）などについても協議された。また、次回ランベス会議を、2020年、カナタベリーで開催することを決めた。

首座主教会議からのコミュニケ（抜粋）
『共に歩み出そうーこの世界における神のみ業のために』

…まず会議は、議題について合意を得るところから始まりました。最初に合意されたのは、聖公会の中で世界大の論争となっている重要な論点を議論することでした。すなわち、米国聖公

会が最近、結婚の教理を変更したことについてです。

首座主教たちが下した全員一致の決定は、痛みが伴うことではありませんが、私たちの間にある違いにも拘わらず、キリストの体における一致を深いとところで表すものとして、私たちは共に歩む、ということでした。私たちは、いかにアングリカン・コミュニケーションの諸教会が共に歩むことができない、私たちの一致を強めることができるのかという課題を託された、



会議初日の夕の礼拝

首座主教のメンバーからなるワーキング・グループからの勧告を受け取りました。ワーキング・グループの勧告は、従前の首座主教会議の諸声明を首尾一貫させた時に、米国聖公会の結婚の教理についての最近の変更というものが、米国聖公会のアングリカン・コミュニケーションとの関係に対してどのような帰結をもたらすのかを述べるものとなりました。

「補遺A」の第7、第8にある勧告は以下の通りです。

⑦「共に歩みたいというのは、私たちの一致した願いである。しかしながら、これらの事柄の深刻さに鑑み、向こう3年間、米国聖公会は、もはや、エキキュメンカル、および宗教間の協議体において、私たちを代表しないし、アングリカン・コミュニケーション内の常置委員会を構成する者として任命されたり、選出されたりするべきではなく、アングリカン・コミュニケーション内の協議体に参加する場合も、米国聖公会は、教理や教会行政に関するあらゆる課題についての意思決定に加わることはない、ということを求めることによって、この隔たりが存在することを、私たちは公式的に承認するものである。」

⑧「私たちは、関係の回復、相互の信頼の再構築、傷の残滓の癒し、私たちの共通性の範囲の確認、私たちの間にある大きな隔たりの探究、それらがキリストの愛と恵みのうちに私たちの間に保たれることの確証を目的として、私たちの話し合いを続けるためのタスク・グループを任命するよう、カナタベリー大主教に求めた。」

理と教会行政についての、いかなる（一方的な）決定に対してもまた、適用することができるとこのプロセスを、さらに進めていくこととなります。

首座主教たちは同性愛を嫌悪する偏見や暴力を非難し、性的指向性の如何に拘わらず、牧会的配慮と愛の奉仕をささげるために、共に働くことを決意しました。この確信は、私たちがイエス・キリストの弟子であるところから導き出されるものです。首座主教たちは、同性愛の内にある人々に対する刑罰を拒絶することを、再確認しました。

首座主教たちは、キリスト教会、またアングリカン・コミュニケーションの中でも、しばしば、性的指向性を理由にして、人々を深く傷つける行為が為されてきたことを認めるものです。こうしたことが起きた地にある首座主教らは、深い悲しみを表明し、セクシュアリティ如何に拘わらず、すべての人々に対する神の愛は等しいものであること、教会はその行動によって、今後決して不信を生むような印象を与えてはならないことを、再度、確認しています。

これらの勧告は、出席した首座主教の多数によって採択されました。私たちは、私たちの一致を脅かす、教

（訳・司祭 西原廉太 中部教区）
※尚、全文は管区ホームページに掲載されています。

人の死や悲嘆に立ち会い、そこに流される涙を見ますが、学校のチャブレンは卒業の時のように、旅立ちと希望のキラキラした涙を見ます。また大学4年間の成長ぶりに驚かされます。大人はなかなか変わりませんからね。何年越しの計画ではなく、年毎に学生スタッフは代替わりするので、1年で完結させなければならぬこともありエネルギーが弱くてもありエネタルが弱いとも一般的に言われますが、逆に理解力も高く感受性も鋭いです。

— 5年間教会から離れていらつしゃいますが信徒訪問をしたくなることはありませんか
宮崎 あります。このチャペルにも信徒はいますので頻度は多くはないけれど葬送式や病床訪問をすることがあります。すると言葉は変ですが「本務をしている」と感じます。私は牧師として召されたつもりですので、やはり人の生死の苦しみに寄り添って一緒に居るとき、神様の力がその方に流れていくのを感じます。
— 先生が若い人にキリスト教を語る時に、これだけは伝えた

いということは何ですか
宮崎 私はよく冗談半分で「僕は愛の伝道師だ」と言うのですが、とにかく関わり続けたいのです。私自身も神学院で、「人間に関心を持ちなさい」「人がどうやって生きていくのか関心を持ちなさい」と先生方に言われてきました。それを徹底されたのが神様でしょう。神様は浮世離れしているのではなく、とにかく神様は人間のことが気がかりで人間に関わり続けた、それが神様の歴史なのでしょう。

— 人と関わることが苦手で、引きこもりがちな最近の若い人にそのようなキリスト教のメッセージが伝わりにくいのも教会に出来ない一つの理由でしょうか
宮崎 リアルなコミュニケーションが苦手な人でも、SNSやそれぞれのコミュニケーションツールがあると学校でもよく話題になります。それは単にハード面だけでなく、言語やロジック、つまり物の考え方などにおいても多様なので、今の時代はいろいろな表現への感受性も必要なのでしょう。
— キリスト教もそんないろいろ

るな言語を発信していかなければならないですね。最後に何かメッセージをお願いします
宮崎 キリスト教も教会も楽しいことがたくさんあります。信仰生活や教会生活を送る中でいろいろと不満もあるでしょうが、楽しいことがあるから離れないのではないのでしょうか。その楽しさ、面白さを私たちはもつと自覚したほうがいいと思います。人数が減ってきたとかお金がないとかの話も現実的には大事ですが、それが宣教方針にはならないと思います。私たちが面白がつて楽しくやらないと周りには伝わらないでしょう。私たちがそれを満喫して生きることによって、それに応えてくれる人がいる。そこに希望があります。

— 本場にそうですね。今日はどうも有難うございました
宮崎 ありがとうございます。



「司祭のこの一冊」

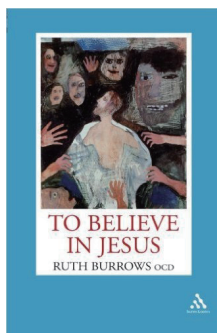
『To Believe in Jesus』

Ruth Burrows 著

Hidden Spring 出版

2010年刊

司祭ウィリアム・ブルソン



ルツ・バローズは英国に住むカルメル会の修道女です。彼女のこの小さな本は、私が何度も何度も繰り返し読んでいた本の1つです。なぜか？それは、私たちが教会生活でつい消極的になつてしまいがちなことをためらわず行うルツの姿が記されているからです。彼女は、神との永遠の結びつきへと至る唯一の道として、イエスと関わるよう勧めます。そして、私たちが信仰と信じているものは、実際には、キリスト教的な概念を自分が気分良くなるために利用しているだけのことが多い、と挑戦するように言います。十字架につけられて復活したイエスに、今ここで起こっている生活のあらゆる側面において、身を任せるということは、何を意味するのか？神がどのように

私を用いるのか知ることはできないとしても、決して報酬を求めることなく、ありふれた日常の小さな物事の中でイエスにおいて神に身を委ねるよう、ルツは呼びかけます。祈りの習慣や礼拝の奉仕は全て、自らを全面的に神に委ねるための手段であり、これこそが「狭き門」である。修道女であるルツが、このような生活は修道院だけのものではない、と言っているのは素晴らしいことです。むしろビジネスパーソンや主婦、学生にとつてのクリスチャンらしい生き方や使命であり、このような生活における信仰と愛と信頼が人を神との結びつきに至らせるのです。私は不思議に思います。なぜ、このチャレンジングなルツの本が私にインスピレーションを与え、慰め、光で満たし、彼女の要求することに困難を覚える時でさえ、福音の限らない愛を感じるのだろうか。それはきっと、シスター・バローズが、道であり真理であり命である唯一の方と、とても親密な生活を送っているからでしょう。

きへと至る唯一の道として、イエスと関わるよう勧めます。そして、私たちが信仰と信じているものは、実際には、キリスト教的な概念を自分が気分良くなるために利用しているだけのことが多い、と挑戦するように言います。十字架につけられて復活したイエスに、今ここで起こっている生活のあらゆる側面において、身を任せるということは、何を意味するのか？神がどのように

私を用いるのか知ることはできないとしても、決して報酬を求めることなく、ありふれた日常の小さな物事の中でイエスにおいて神に身を委ねるよう、ルツは呼びかけます。祈りの習慣や礼拝の奉仕は全て、自らを全面的に神に委ねるための手段であり、これこそが「狭き門」である。修道女であるルツが、このような生活は修道院だけのものではない、と言っているのは素晴らしいことです。むしろビジネスパーソンや主婦、学生にとつてのクリスチャンらしい生き方や使命であり、このような生活における信仰と愛と信頼が人を神との結びつきに至らせるのです。私は不思議に思います。なぜ、このチャレンジングなルツの本が私にインスピレーションを与え、慰め、光で満たし、彼女の要求することに困難を覚える時でさえ、福音の限らない愛を感じるのだろうか。それはきっと、シスター・バローズが、道であり真理であり命である唯一の方と、とても親密な生活を送っているからでしょう。

モニカ会の働き

モニカ会会長 佐藤 正光

モニカ会

は、東京教区が認めた聖職候補生および



志願者に対して、聖公会の神学校での勉学を支えるために、図書費、家族費等の支援を行なっている組織です。モニカは聖アウグスティヌスの母の聖モニカのこと、夫や息子のために献身した守護聖人として知られ、神学生を支える存在という意味で会名としております。

モニカ会は東京教区の委員会ではなく任意の団体ですが、小笠原を除く教区の全教会から幹事を選出していただき、幹事全員の合議のもと運営しています。幹事の中から私を入れて8名が常任幹事として選任され、予算決算を始め議案等を協議し、年2回の定例幹事会で決議します。今年度、幹事の皆様のご意見を容れ神学生への支援金(図書費)を月額5万円から7万円に増額いたしました。書籍代、交通費の値上がりや、消費税の増額等を考慮したもので

す。また、神学院へも今年度は

150万円を寄付しました。これは、他教区から来て勉学している神学生にも間接的ながら支援しようという思いからです。

現在、海外へ留学して神学をより深く学びたいという聖職候補生、志願者が増えてきました。グローバル化の時代なので当然のことですが、そうした人への支援の在り方はこれまでモニカ会で検討していなかったため、今後、海外留学生に対する支援について議論し、策定したいと考えています。

幹事会では、将来聖職として奉仕してくださる聖職候補生が増えるにはどうしたらよいか、教区の聖職養成委員会とも協力して議論しております。神学院には今、3名の教区神学生が学んでいます。私達は、神学生が学業を成就し聖職となられることを心から願い、活動しております。どうぞ聖職候補生、志願者への皆様のお祈りとご支援をこれからも
よろしくお
願い申し上
げます。



20周年を迎えて

ぶどうのいえ前理事長

堀内 昭

「ぶどうのいえ」は1995年11月5日に竣工感謝式を行い、昨年11月7日に20周年を迎えることが出来ました。ひとえに多くの方々をはじめ東京教区の各教会や日立製作所およびそのグループのご支援の賜物であると、日頃から感謝しています。

20年前に、東京聖テモテ教会にあつた女子寮の利用者が少なくなり時代の流れで閉鎖し、その後利用を教会員で話し合いました。アンケート調査や当時のテモテ教会牧師の大畑司祭のアメリカの「マクドナルドハウス」紹介などを経て「東京聖テモテ愛の家―難病の子どもとその家族のための滞在施設―」として発足しました。当時の後援会会長金井務氏が、外部からの支援を受けるためには法人格を取得するようにと勧めて下さいました。開設後4年目に教会としての活動から離れNPO法人となりました。さらに寄付控除の優遇措置が認められている「認定」を10周年に先立ち、一足先

に2005年5月30日付で国税庁から全国で30数番目に受けることが出来ました。開設当時は国内に10室以上の施設は、ほとんどなく社会の注目を浴び、あちこちから寄付が集まりましたが、新しいこのような施設も数年経つと人々に忘れられてゆく運命に有ります。そのような時期に「認定」の称号を取得でき



たので、国税庁の審査官の言うように、「認定が認可されたら30%は、寄付が増えますよ。」が現実になり、高額のご寄付を戴くことが出来、運営も安定することが出来ました。

開設当初は、部屋の利用率が年間80%前後、利用者も5千人を越えましたが、現在は、全国

に100を越える施設が出来高度な医療も東京から地方へと拡がりました。昨年2015年は、47%、利用者延べ3112人でした。しかし「とても助かりました。」などの利用者の声は今も変わることなく寄せられています。必要とされる施設だと実感しています。

利用料は、開設以来20年間、多くの方々からのご寄付のお陰でシングル千500円、ツイン2千円、トリプル3千円に据置いています。本来、本施設の規模であると専従の職員が必要ですが、財政上困難であるため、曜日毎のボランティア諸姉兄が運営を担当しています。20年間この方式で問題なく過ごすことが出来たことに感謝しています。

建物は、女子寮時代を含めて47年経過していますので、施設の老朽化等があちこちに見られます。今後は現在の環境を保つていくためには、定期的な手当をしなければなりません。

今後とも、今より一層のご支援を賜りたいと願っています。

私たちの教会 [2 2]

ようこそ東京聖十字教会へ



東京聖十字教会は関東大震災の翌年1924年12月、被災者の多くが山の手方面に居住を構えたため、転住信徒と開拓伝道のために当時の茂原郡世田谷町松陰神社に近い畑の中（現在地）に創立されました。百坪の土地を借り、木造平屋トタン葺きの住宅型日本家屋まさに「バラック建て」の安普請でした。

3回の増築後、海外からの資金援助もあり、1961年、世界的にも有名な建築家アントニン・レイモンド氏の建築事務所が奉仕で設計監督をして下さり、「合掌造り教会（蒲鉾型）」に生まれ変わりました。当時から見学者が結構あり、現在でも年間百名近くの見学者が訪れます。その後、会館、牧師館が増築され、今日に至っています。

今年で宣教92年を迎える当教会には、いくつかの宝物があります。一つは聖堂の壁にいつも掲げられている聖画「十字架の道行き」です。そしてこの聖画には物語があります。



竣工当時、若い教会員たちは素晴らしい聖堂に是非聖画が欲しい、わずかな献金でも何時かは聖画が与えられるだろうと「落穂献金」を始めました。しかし、その献金が盗難に遭ってしまったのです。当時の聖十字教会牧師・今井丞治司祭

はその事を聖アンデレ教会員・和田平三郎画伯に話されました。それを受けて画伯は聖画「十字架の道行」を画く約束をして下さいました。1963年大斎節前に画伯は、14留の聖画「十字架の道行き」を献上して下さいました。それから半世紀余。鬼気迫る程の迫

力がある和田画伯の聖画は、聖十字教会の信仰をしつかり見守っているように思えます。

礼拝の前に撞く鐘も宝物の一つです。故島田忠雄司祭がまだ聖十字教会員で、現役の船員をされていた頃に、廃船になる船の鐘を譲り受けて下さいました。大きさは高さ約15cm、直径約20cm。鐘には船名の「松戸丸」と書かれています。礼拝の前に鳴らす鐘はよく響き、清々しい中にも温かみのあるいい音がします。

2012年4月に高橋顕司祭が当教会牧師に任命されました。2014年11月からはイギリスからステイブン・A・クロフツ司祭がご家族で牧師館に入居され、この4月から当教会副牧師に任命されました。通常約20名の出席者で主日礼拝を守っています。「創立からの長い歴史をいかに受け継ぎ、また新しいものをいかに作り出していくか」聖十字教会のこれからの大きな課題です。

（ペテロ 田中武晴）

《信徒リレーエッセイ》

自らの口で発信すること

神田キリスト教会

沖田 直哉

牧師と信徒の数は減少傾向。神田では昨年4月から大畑主教が管理牧師になり専任の聖職者が不在です。

その現状になった原因は色々考えられますが、聖公会の文化からしての宣教による新しい求道者を開拓する力の弱さもあるのかもしれない。

そこで神田では第1日曜をみことばの礼拝で行い、奨励は信徒によって行うこととなりました。前例が無いことですから拒否反応も強いものの、「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです」（コリント10:13）とあるように、難しいことかもしれませんが、自分の信仰を証する素晴らしい機会と信じています。

第1回の4月は私が担当。12分半を無事に行うことができました。主の支えに感謝しています。

下町大空襲記念礼拝

3月10日の19時より、神田キリスト教会で下町大空襲記念礼拝がささげられた。



早乙女勝元氏

下町Gでは毎年この日に礼拝を行なっているが、年々その時の証言・お話をしてくださる方が少なくなり人選に苦慮している。今年は幸いなことに、東京大空襲記念館の館長である早乙女勝元氏にお話しを伺うことができた。

早乙女氏のお話は、コル映画「日本と原発」が暴く原発の真実

3月12日

(土)の午後、阿佐ヶ谷聖ペテロ



河合弘之氏

教会を会場に、弁護士の河合弘之氏の監督による「日本と原発」の上映会が、教区の3つの委員会・協議会の共催で行われた。映画は2時間を超える大作で、内容は被災地の現地取材、専門家へのインタビュー、監督自身による原子力ムラの

べ神父ではじまり、日野原氏との対談映像をささみ、長崎の原爆で被爆し、その治療に専念したカトリック信徒でもある永井隆博士の言葉「国際情勢次第では、日本人の中から、憲法を改めて戦争放棄の条項を削れ、と叫ぶ者が出ないともかぎらない。そしてその叫びが、いかにももつともらしい理屈をつけて、世論を日本再武装に引きつけるかもしれない。そのときこそ、どんなのしりや暴力を受けて利権構造の説明など、多方面から原発の実体を暴いたもの。」

も、きつぱりと『戦争絶対反対』を叫び続け、叫び通しておくれ！ たとい卑怯者とおきつぱり、裏切者となたかされても『戦争絶対反対』の叫びを守っておくれ！』で締めくくられた。

また、日野原氏が語った「当時薬がなく、火傷の手当に新聞紙を燃やして、その灰を塗ったがほとんど助からなかった」という証言や、火から子どもを守るため堅い土を掘って子どもを入れ、そこに覆い被さって亡くなった母親場したとか。

氏は世界がフクシマの事故を見て原発から撤退する中、再稼働を進める日本の異常さを糾弾し、現在、第3作のペインタゴンの自然エネルギー研究などを取材した「自然エネルギー 未来からの光と風」を製作中という。

会の最後には原発事故で全村避難となった飯館村の村歌を独唱、村と村民の暮らしも夢も永遠に奪った原発への怒りを氏と共有した会となった。

ムラの圧力で資金調達にも監督探しにも苦勞した末、自身の資金と監督で製作した映画は千回以上上映され、前日に行われた板橋の上映会には千人以上が来

の話などが印象に残った。話を聞き感じたことは、わずか2時間ほどで10万人の命を奪ったこの空襲の悲惨さを語り継ぐことが、私たちが平和を伝える最も説得力のある言葉となるのではないかと、ということであった。

「訂正とお詫び」

「コミュニオン・イースター号」、「ようこそ聖フランシス聖エリザベス」のご寄稿者名に誤記がありました。不本意にも巻き込まれたお二方に

次回のコミュニオンは、夏号7月24日発行予定

編集後記

今回取り上げた首座主教会議で議論された問題は、決して海の向こうの問題ではなく、教会のあり方が問われる私たちの課題です。

ちょっと聖書、ときどきユーモア (二十五)

1. 夢

信徒「先生の子どもの頃の夢はなんでしたか？」
牧師「実は牧師になるのが夢でした」
信徒「そうですか、それでは夢がなかったんですね」
牧師「はい」
信徒「夢がなかったお気持ちはいかがですか」
牧師「もし夢なら早く覚めてほしいです」

2. お祈り

妻「神さまって、ほんとうにお祈りを聞いてくれるのかしら」
夫「どうしてそう思うんだい」
妻「だって、いつも神さまに長い時間お祈りするのにな、聞いてくれないんですもの」
夫「さすがの神さまも、キミの長いおしゃべりには付き合ってもらえないってことじゃない」

3. 宣伝

信徒「先生、毎週の説教に人目をひくような素敵な題名をつけて、教会の前に張り出しましょう、いい宣伝になると思います」
牧師「それはいいけど、その題名を見て来た人が、私の説教を聞いて誇大広告だと思われないかねえ〜」